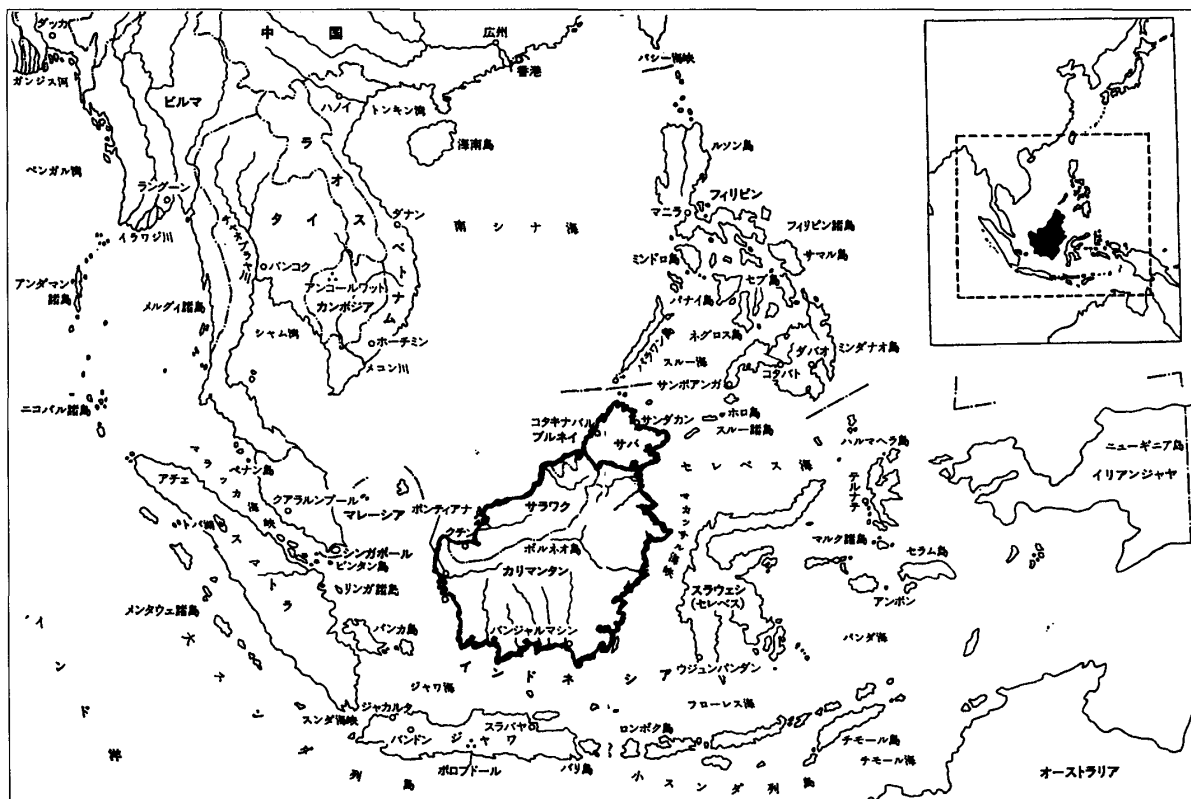


身の丈ほどのフィールド日記—ボルネオ島サバ州から—

村松こはぎ



ボルネオ島サバ州の地図

人にはそれぞれ幼い頃からの、思い入れの強い場所があると思う。私の場合、それはボルネオ島であった。動物好きだったためか、あるいはテレビ番組の中で「秘境」と呼ばれる場所をせっせと訪れていた川口浩探検隊に憧れていたためか、どういふ接点があったのか今では思い出せないがボルネオ島という島が地球上にあることを小学生に上がる頃には既に知っていたと思う。バリ島がインドネシアだということを知ったのが大学でインドネシア語を履修していた頃だから、ボルネオ島は私の頭の地球儀の中で最も早くに特化した場所の1つであったと言える。熱帯のジャングル、人喰い植物、カラフルな毒グモ、空飛ぶカエル、スコールとよばれる雨、こうしたものが私の中では勝手に「ボルネオ島」とイコールでつながっていた。

やがて大学に進学し、卒業論文でボルネオ島とスマトラ島にしか生息しないオランウータンの保護活動をテーマに取り上げたことから、ボルネオ島は私の中でさらに身近なものとなっていった。そして大学院に進学をした1999年の夏、オランウータンのリハビリ施設を見学するために私はボルネオ島へ向かった。これが私にとって生まれて初めての1人旅でもあった。

その初めての調査旅行は初めての1人旅でもあったことから、乗り換え地になっていたクアラルンプールの空港に着く頃には私は既にホームシックにかかっていた。成田を発った翌日、オランウータンのリハビリ施設がある第一の目的地であったサバ州サンダカンに到着。しかしホームシックと通じない言葉に疲れ果て、その日泊まる宿を探すだけで手一杯であったことを思い出す。そして

翌日、リハビリ施設にて森の中を悠々と移動するオランウータンと対面した。これが動物園以外で私が見た初めてのオランウータンであった。その時のことを私は日記に次のように綴っている。

「今日初めてオランウータンを見た。突然ガサゴソという木の触れ合う音が聞こえ、横を見るとオランウータンがいた。よく考えると上野動物園にいるモーリー（上野にいるオランウータンの名前）と同じオランウータンだけど、やっぱり感激した。1999年8月29日」

しかし1人旅の淋しさには勝てず、その後コタキナバル、サラワク州のクチンをまわったものの10日ばかりで成田にトンボ帰りをした。「調査旅行、言うは易し行は難し」を実感した夏であった。

そして1年後の2000年夏、私は懲りずに再びボルネオ島へ向かった。今回は事前に何を見てきたか、どんな資料が欲しいかを一覧表にしていたことから、前回のようなパニックに陥ることはなかった。しかし、今回は逆に前回知り合った友人たちとの再会が嬉しくて、時間を作っては大好きなアイス・カチャン（かき氷のデラックス版）を食べながらお喋りにふけてしまった。

「今日はアイス・カチャンを3杯も食べてしまった。このところ、アイス・カチャンにも2種類あるのではないかという思いがしている。1つはフルーツばかりがはいったアイス・カチャン。もう1つはチェンドル（パンダンの葉の汁に緑豆粉や食紅を加えてつくったカラフルなゼリー）と小豆からなるもの。2000年9月21日」という具合である。

ここまで読んでいただければ明らかのように私は「フィールド日記」というにはあまりにも恥ずかしい日記しか付けていない。こんなのはフィールド日記ではないし、無論調査旅行とも言えないとお叱りの言葉をも受けてもおかしくないと思う。けれどこうした中にも私なりに得たものがあった。それは言うならば、様々なことに現実味を覚えることが出来たということかもしれない。

たとえば、私は論文を書くにあたりボルネオがいに種の多様性に満ちた地であるかという内容の本を読んだ。そこには「地球上の種の半分が熱帯雨林に存在する」とか「ボルネオ島には約40種の固有種がいる」と書かれていたが、机の上でその数字を見てもそれがどの位凄いことなのか、私

の頭には全く入ってこなかった。けれども実際にセピロク自然保護区の入り口に滞在した1週間、陽が暮れるとどこからともなく様々な動物の鳴き声が聞こえ、動物好きの私にはそれが何の鳴き声なのか気がかかって眠るどころではなかった。そこで初めて私はこの島の種の多様性を実感することができた。

また、卒業論文を執筆するにあたりオランウータンの推測生息頭数を調べたことがあった。結果は約3万頭ということになったが、正直私は「何だ、3万頭もいるのか」と思ったものである。けれど、ホームシックのためとにかく早く日本に帰ろうと移動手段を全て飛行機に頼った99年の夏、空の上から初めてボルネオ島を眺めた時、ボルネオがいかに大きな島であるか、そしてこの広大なボルネオ島で3万頭という数字がいかに少ないかということを実感した。

サバ州はオイルパーム農園で有名な場所である。私は何度かビデオでその様子を観たことがあったため状況を知ったつもりになっていた。しかし、州都コタキナバルからバスでサンダカンへ移動する際、眼下に広がったオイルパーム農園の大きさは私の想像をはるかに上回るものであって、この妻しさは見た者でなければわからないと思ったほどである。

冒頭で述べた通り、私は川口浩探検隊のジャングル探検に憧れていた。ジャングルには何かおどろおどろしいモノがいて私はそういうモノに憧れていた。だから熱帯雨林はまさに憧れであった。しかし実際、リハビリ施設の一般遊歩道を反れてみると足はグチヨグチヨの湿地にのみこまれてゆき、マラリアを媒介しているかもしれぬ蚊が体にまとわりつき、ムンムンとする湿気に私は気分が



セピロク・オランウータン リハビリテーションセンターにて
(1999年 夏)

悪くなり3歩と進まぬうちに引き返した。熱帯雨林は私の想像とは大きくかけ離れたもので、とても私のような者が軽々しく1人で行けるような場所ではなかった。

本や写真や映像を見ているととかく人間はその状況を自分が体験したかのような錯覚に陥ったり、解ったような気になったり、あるいは逆に全くピンとこないままに素通りしたりするものなのかもしれない。私の場合が明らかにそうであった。でもこの2回の調査旅行を通し、実際にその地を踏むことで、私が勝手に抱いていた大部分の想像は現実とはかけ離れたものであったことを知った。様々な情報が行き交う今日にあっては尚更、自分の目で確かめ、現実味を持って物事に接することが重要になってくるのかもしれない。